

以上症例中以前に治療したるもの9例あるが、この内1例は以前2年間に互りマフアルゾール10.2g、油性ペニシリン1200萬注射すれどワ氏強陽性を示し、肝障礙にて治療を中止せる後期潜伏梅毒で、治療中止後1年當科來院したものであるが、當科にてマフアルゾール3.6g注射するも依然として強陽性を示す例がある。之は明らかに抗療性梅毒を思わせる。

以上の症例より妊娠中血清梅毒反應の陰性化は困難であるが、ある一定度の薬用量を注射すれば、たとえ臍帯血が陽性であつても2カ月後には陰轉化し異常なき新生児を得る事が出来ると考えられる。治療基準として必要にして十分なる最少量の決定は今後の研究に俟たねばならぬが、マフアルゾール2g以上、ネオネオアーセミン12g以上、之にペニシリンを併用すれば良いと考える。必要にして十分なる最少量への追求には、血清ワ氏反應の抗體價の變動を注視してより最少量へ近づき度いと考へ之については後日發表する豫定である。又抗療性梅毒については未だ眞に梅毒が治癒しないか、又は梅毒は既に治癒しているが血清の方に梅毒と直接關係なくカルデオライピン又は牛心アルコールエキスに反應する抗體が残存するものと考えられる。之について血清ワ氏反應の抗體價の變動に關連してより正確な血清梅毒反應の術式が要請される。

次に新生児先天性梅毒にはペニシリンは副作用少く非常に有効で、短時日に陰轉化出来るが、成人先天性梅毒及び後期潜伏梅毒の陰轉化は非常に困難である。

最後に妊婦梅毒に於て分娩後の治療を奨むれど出産後異常なき新生児を得るや治療又は血清ワ氏反應の變化觀察を中斷するものが多い。之は危険な事で患者にして梅毒なるものを認識させ、充分なる治療効果を擧げ得る様努力されねばならぬ。

36. 各種降壓劑の妊娠中毒性高血壓に對する治療効果(第2報)

(横濱醫大)

森山 豊, 安達健二, 宇佐美昭, 岩橋五郎
宮崎節生, 秋葉幸良, 竹下俊雄, 發地良英

高血壓は晩期妊娠中毒症の諸症状中最も重要なものである。これに對する各種の降壓劑(TEA 鹽, ヘキサメトニウム鹽, Veratrum 等)の治療効果については、昨年の本總會に於て第1報した。更にこれらの諸劑についての例數を重ねるとともに、Ranwolfia serpentina, Hydrazinophthalazine 劑等を妊娠中毒症患者に使用して、

その血壓に及ぼす影響を觀察するとともに、腎、肝機能、眼底血管、並に血壓末梢血管等に及ぼす影響を検索した。特に子癇に對する降壓劑の効果を検討した。

1. Tetraethylammonium 鹽

本劑は降壓作用が不確實で弱く、個體差が多く、また効果の持続も短く、副作用も多いので、治療的價値は少い。

2. Hexamethonium 鹽

降壓作用は前者に比して確實強力で、持続時間も長い。たゞ効果は個人差が多く、脈壓の減少の多い缺點がある。また胎盤循環障礙による胎兒への悪影響も考慮せねばならない。

3. Veratrum viride

これの靜注は強力な降壓作用があり、脈壓の減少も少く、効果の持続も比較的長く、恢復も徐々である。切迫子癇等で急速に降壓を望む場合に適し、効果を更に持続させるためには點滴靜注が良い。

4. Ranwolfia serpentina

前者に比べて降壓の現われ方がおそいが効果の持続安定性に於て勝れている。

子癇又は切迫子癇に對しては、7例中4例に發作又は再發を豫防し、1例に一時的抑制効果があつた。他の治療法とともに、降壓劑を使用することは有効と考えられる。

かつ降壓劑は、單獨よりも、2種ないし3種の併用のほうが、さらに効果がある。

37. 妊娠中毒症を對象として行つた東京都心部居住者の妊娠分娩の實態調査

(都立築地) 竹内 繁 喜

妊娠中毒症調査委員會の依頼によつて、東京都中央区内居住者で、昭和28年度中に分娩した婦人の實態を調査し、次の様な結果を得た。

I. 参考事項 中央区は舊京橋區と日本橋區とが合併されたもので2つの保健所の管理に分れている。

	中央保健 所管内	日本橋保 健所管内	合 計
28年1月の總人口	103,054	65,121	168,175
28年度中の出生數	1,328	730	2,058
28年度中の死産數	131	62	193

II 出生についての調査

(1) 立會者介助者及び施設別

1. 醫師の立會いによるもの 1,437例(65%)

4. 病院醫院での分娩 1,414例